

「八ッ場ダム建設事業の検証に係る検討報告書（素案）」に対する関係住民の意見聴取

平成 23 年 11 月 6 日（日）10:00～12:00

さいたま新都心合同庁舎検査棟

発言者：意見発表者 2

●●と申します。私の方からは八ッ場ダムは利水・治水の両面から不要であるという意見を申し上げたいと思います。私はパワーポイントを使いますので、こちらのほうをごらんいただきたいと思います。

まずは利水の方ですが、今回、関東地整が示した利水対策案というのは八ッ場ダム以外に四つあります。それらと比べてみて費用が圧倒的に八ッ場ダムが安いということで八ッ場ダムを選ぶべきだということになっています。その中で一番端的な例は、この富士川からの導水を中心とする案であります。八ッ場ダムの利水分が残事業費が 600 億円、それに対して富士川からの導水を中心とする案は 1 兆 3,000 億円、これと比べて八ッ場ダムが有利と。そういう話にならんような比較をして、八ッ場ダムを残るようにしてるわけであります。この富士川というのは、静岡県の富士川です。そこの河口部から延々と 200km の導水管を引いて利根大堰まで持ってくるという、そういうあり得もしない話になっているわけです。何故、このような比較が行われているのかということですが、今回の検証の一番の問題は、利水についての一番の問題は、利水予定者の要求をそのまま認めてしまっているということです。八ッ場ダムの開発水量 1 日当たり 192 万 m³/日になります。これは水道用水に換算しますと 350 万人以上、膨大な水量です。今更、これだけの大量の水量を得る方法はあるはずがありません。結局、現実性のない利水対策案を並べて、それと八ッ場ダムと比較して、そして八ッ場ダムがいいという、まさしく茶番劇の検証が行われているわけであります。で、その八ッ場ダムは利水上、必要か否かということ改めて見ていきたいと思います。このグラフは利根川流域 6 都県の水道の一日最大給水量の推移を見たものです。横軸が年度で縦軸が水量ですが、この 6 都県の水道の給水量は減り続けております。1992 年度から 2008 年度の間で約 182 万 m³/日減っております。この水量、減少水量は八ッ場ダムの開発に匹敵する。そういう水量が既に減ってきているわけです。このように水需要は減る時代になってきたということであり、何故このように減ってきたかということですが、首都圏は人口は多少まだ若干伸びております。一方で一人当たりの水量はどんどん減ってきているんですね。この 1992 年度から 2008 年度までの 16 年間で 2 割も減っちゃってるんですよ。その減ってきた要因はいくつかあります。節水型機器の普及、漏水の減少、それから生活様式の季節変化の平準化ということで夏と冬の生活様式にあまり大きな違いが出てこなくなったということもあります。そのうち最も大きなのは節水型機器の普及ですけども、最近のこの水使用機器、水洗トイレ、電気洗濯機、食器洗浄機等の水使用機器ですが、これらの水使用機器は節水型であることが重要なセールスポイントでありまして、より節水型が開発され、それが普及してきているわけです。このグラフはあるトイレメーカーの使用水量の一回流したときの水量の推移を見たものです。かつてこのメーカーでは、1 回流すと、1970 年代のものですけども、16%の水が流れておりました。それが今や、4~5%ということで、1/3 以下まで減っているわけですね。こういう節水型機器は今後も普及していくということですから、これからも一人当たりの水量の減少は続いていくということでもあります。一方で首都圏の人口です。今は若干伸びていますが、これも日本の総人口がピークを迎えておりますので、それに伴って近い将来、2015 年度以降は減少傾向に向かうという予測がされております。となりますと人口が減っていく、それから節水型機器の普及で一人当たりの水量が減っていくとなりますと、今この減少期が続いているわけです。これは首都圏の水道の日最大給水量ですが、今後

も減っていくことは間違いありません。ところが、国の予測、国交省の予測、第5次利根川・荒川フルプラン、利根川・荒川の水需給計画の予測はこのようにどんどん伸びています。今はもう、これからどんどん減ってきて1日1,200万m³/日ぐらいになってきています。それが1,500万m³/日なんてそれはあり得ないよ。今後はむしろ減って1,000万m³/日切っていく、そういう方向になっていくわけです。ということで八ッ場ダムを検証の前提になっているのは、このフルプランのこういう架空の予測なんですね。このように増加なんてのはあり得ないわけですから、八ッ場ダムの検証は基本から間違えているということです。で、この長期的にこの水量が減っていくということは実は国交省も本当は認識していることなんです。3年前に国土交通省水資源部で地球温暖化に伴う今後、水需給がどうなるかという長期的な、超長期的な予測をしております。そのうちの水需要の予測を見ますと利根川流域の生活、これは水道用水のことですけども、50年後には今の6割から7割に減ってしまう。それから100年後には3割から4割に減ってしまう。何故減るかと言うと、先ほど申し上げたように、人口の減少と節水機器の普及によって減ってきている。国交省も実は認識していることなんですね。だんだん考え方ががらりと変わってくるということです。これは東京都の水道の1日最大配水量と保有水源の動向をみたものですけども、東京都の配水量の減り方はすさまじいです。最近15、16年の間に120万m³/日以上減っています。一方、利根川・荒川で多くのダム建設等の水源開発が行われてきましたので、東京都がこれを整理しております。ということで、今、東京都は1日当たり200万m³/日という大量の余裕水源を抱えております。今後は水需要はさらに減ってきますので、この余裕水源がもっとももっと大きくなっていきます。水余りがますます顕著になっていく、そういう時代であります。ということで渇水が来てもその影響が受けにくい構図にどんどんなっていくということですね。そういう時代でありますから、八ッ場ダムが利水まで必要であるはずが無いのです。時代はもう変わってきているということです。それから次に今度、治水の方の話に移ります。治水の方でも他の四つの案と比べてみて、八ッ場ダムの残事業費が安いと。治水分が700億円ということで、他の案、河道掘削、一番安いのが河道掘削で1,700億円、1,000億円も安いということで八ッ場ダムを選んできたという結果になっております。これはちょっと気をつけなければいけないのは、これは残事業費でありまして、今まで使ったお金も含めると治水分の全事業費は2,400億円です。これと他の対策案と並べると、高いですね八ッ場ダムの。ということは八ッ場ダムの計画を作る前に他の案とキチンと正しく検討すれば、正しいかどうか検討していれば、少なくとも八ッ場ダムを選べるはずはなかったということの意味するわけです。残事業費だから残っているわけですね。とにかく残事業費と比較すると他の案が高い。これは何故かということです。これはカラクリがあります。今回、八ッ場ダムの治水効果を大幅に引き上げました。八ッ場ダムの削減効果、今まで関東地整が公表していたのは八斗島地点で基本高水流量毎秒22,000m³/sに対して、平均600m³/sの削減が出来ると。八ッ場ダムの効果です。削減率としては2.7%です。今回数字ががらりと変わりました。八斗島の目標17,000m³/sに対して、1,176m³/sも削減できると、割合では6.9%に跳ね上がってしまったわけです。これをグラフに示したのもですけども、八ッ場ダムの治水効果を比にしていくと従前の数字の2.6倍に跳ね上がったんですね。このことによって、河道掘削案等の他の代替案の費用が跳ね上がったのです。それによって八ッ場ダムが選べるように。というように八ッ場ダムの効果を今回、意図的に引き上げたのです。八ッ場ダム、治水上意味を持つかどうかはとりあえず、これからお話ししたいと思います。八ッ場ダム、実は治水効果小さいんですよ。最近60年間、一番最大の洪水は平成10年9月洪水でありました。この時、もし八ッ場ダムがあつたらどれくらい効果があるかということを経験してみました。観測流量によって、割合正確に計算できるんですけども、八斗島地点どれくらい効果あるかという、最高水位を最大大きくみて13cm下げるという効果です。これが意味を持つかどうかと

ということですが、この時の八斗島の最高水位は堤防の一番上から 4m 以上も下を流れておりました。下でありました。ということで 13cm ぐらい下げても何の意味もないですね。これを現場で見れば、ちょっとこれは淀川の方の話で同じような写真を使っておりますけども。淀川でも大戸川ダムの効果ということが問題になって現場で確認する作業がございました。この場合、3.2m で、ここで十何 cm 下げても何の意味もないじゃないかということが、淀川水系流域委員会で問題となったんですけど同じことが言えます。利根川についても八斗島地点で 4m より下のところで十何 cm 下げても何の意味もないんですよ。そんな効果しか持ち得ないということです。さらにこの効果、今は八斗島地点の話をしました。この効果、実は下流に行くとどんどん減衰していきます。ダムの効果というのは下流に行くとどんどん小さくなって行くわけです。これは国交省が計算したやつですけど、八ッ場ダムがあつて八斗島、もっと下流の江戸川の頭のところ、それから利根川の下流の取手について国交省で計算してるんですけども、結果としてだけ申しますけども、八斗島地点の半分程度まで江戸川上流のところでは、一番上では下がってしまいます。江戸川下流ではもっと小さくなりますよ。ゼロになるかもしれない。それから利根川下流の取手地点では 1/4~1/6 まで低下してしまう。ということで八ッ場ダムの効果というのは下流に行くと、どんどん小さくなるということでもあります。それともう一つ。八ッ場ダムの効果というのは雨が降ってみなければわからんというギャンブル的な治水対策なんですよ。八ッ場ダムの予定地、集水域にある程度雨が降れば、多少は効果があるかもしれない。しかし、そこに降らなければ効果はないわけですね。その端的な例が利根川の治水計画の基本になっている昭和 22 年のカスリーン台風洪水です。この時、もし八ッ場ダムがあつたら、どんくらい効果があつたのかということ国交省は計算しているのですが、実はなんとゼロなんです。全く効果が無いと。これは当時の雨は八ッ場ダム予定地の上流域の、集水域の雨量が少なく、時間帯がずれていたということですね。それから想定時の大変な雨が降った場合、今年の台風 12 号のですね、9 月の紀伊半島のように。その時には八ッ場ダム満杯になって治水機能を失ってしまうことは間違いありません。ということ考えると、八ッ場ダムは利根川の治水に意味を持たないわけです。今、利根川・江戸川の治水対策は何が求められているのかということですけども、時間の関係で詳しくはお話はできませんが、流下能力は長年の河川改修、河道整備の成果として確保されてきております。ただ問題があります。脆弱な堤防が各所にあり、放置されているということです。洪水、水位が上がった場合、ここにあるすべり破壊とか、あるいはパイピング破壊、そういう形で堤防が決壊する危険性があるところがですね各所にある、これは国交省関東地整の調査結果で明らかになっております。この対策をしなければいけません。ところがこれからはですね、こういう非常に厳しい時代でありまして社会資本の新しい投資がどんどん先細りになっていく、そういう時代なんですね。ですから八ッ場ダムを造ってさらに堤防の強化をやればいいという話ではありません。今この不要な八ッ場ダムを止めて、その河川予算を流域の安全を守る上で、喫緊の課題である堤防の強化ですね、そちらに振り向けなければいけません。そうしないとこの脆弱な堤防、洪水時に決壊の危険性のある堤防が半永久的に残されてしまうわけで、そういう意味でも今、八ッ場ダムの建設をやめなければならないということが言えます。以上で利水・治水の両面で八ッ場ダムが不要であるということをお申し上げました。以上で私の意見発表を終わります。

以上